

2021年12月24日作成(2024年12月20日一部改訂)

義高 互

○なぜ学校に来れないのか

2019年度に転勤した私はLD・ADHD教室の担当となりました。前の年に設置されたばかりの通級学級は矛盾と制約ばかりの学級でした。「なぜ教員と子どもが学校に来れないのか」という疑問をテーマにしました。通級学級には精神疾患やLDという前提がついていました。基本的に在籍する通常学級に居たいと思う子供は通級には通いません。通級に来る子供たちは、教室に居たくない子供達であり、不登校傾向がある場合が多いようでした。2016年度の前任校で学校行事の際に子どものタイプを分類しました。

○モデルSL

その中で「タイプ忍」が気になっていました。前に立ちたがらず、人との関わりが得意でなく、嫌と言えずストレスをため込んでいるように見える存在でした。見方によれば積極的に活動に参加できない「タイプ忍」は冷ややかな対応をされているようにも見えました。そのタイプ忍は通級に通う生徒の状態に似ているように感じました。そのタイプ忍に多い仮想モデルを「物言わぬ退席者=(silent leaver)モデルSL」と名付けて、不登校傾向の子どもの性格等を最大公約的にまとめ、その分析を行うことにしました。

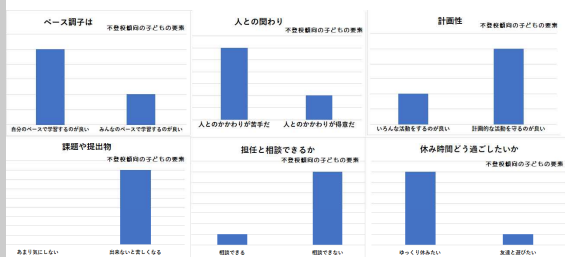
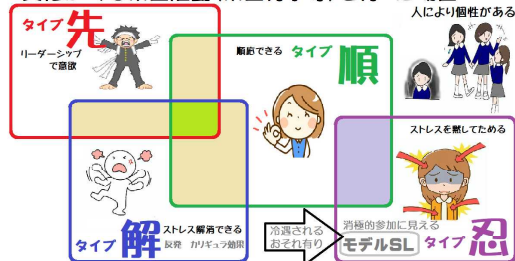
通級してきた全員には毎時間聞き取りやアンケート行っていました。それとは別に不登校傾向が事実として表出した9名中8名の子どもには、さらに別の聞き取りを行っています。その結果から最大公約要素を集約して「モデルSL」と名付けた仮想モデル像を構成しました。通級学級でとった基礎的なアンケートや聞き取り調査は別論文にまとめています。ここではその他にモデルSL構成用に聞き取った資料をあげます。そして不登校傾向に多いと考えられる仮想モデルSLを提示します。

まず2016年段階で分類しました「タイプ忍」について、その時点で分類した要件を上げます。これは別項目に詳細があります。前に立つのが苦手で、人との関わりも得意ではない、反発が上手にできない、嫌とはっきり人に言えない、という性格です。多くの指示を受けるとストレスをためやすく、そのストレスを解消することも得意ではない。そういう傾向を加味してモデルを構成しました。

SLの良い面から挙げます。一人で行動することができる。見通しや計画を立てて行動ができる。日記などで文章化するのが得意です。大人しく静かな言動です。人に反発や批判をせず、他者に強制や命令もしない。学級の中で教師や友達に迷惑をかけることが少ないと思われます。一人でコツコツ丁寧に学習できるように思われます。

そんなモデルSLですが、学習課題や環境によっては苦手部分が表出

変化がある集団活動(集団行事等)を行った場合



要支援の子どもは 本心を伝えられるか

2019年4月通級学級中学2～3年 21名

学校の無記名アンケートは本心を書いているか	名前を記名アンケートでは本心を書いているか
全て本心を書いている 2 9. 6%	全て本心を書いている 1 4. 7%
本心を書いている事が多い 6 28. 6%	本心を書いている事が多い 2 9. 6%
半分以上本心を書いている 7 33. 3%	半分以上本心を書いている 9 42. 9%
少しだけ本心を書いている 5 23. 8%	少しだけ本心を書いている 7 33. 3%
全く本心でないことを書いている 1 4. 7%	全く本心でないことを書いている 2 9. 6%

学校の相談期間の相談で本心を話しているか	本心と言えない NOと言えない
全て本心を話している 0 0. 0%	本心と言えない NOと言えない
本心を話している事が多い 1 4. 7%	指示を受ける
半分以上本心を話している 6 28. 6%	嫌、苦しいと言えない
少しだけ本心を話している 11 52. 3%	命令指示されるのはストレス
全く本心でないことを話している 3 14. 3%	リラックスの時間が必要
	自分のリズムを崩せない

モデルSL

長所

自分のペースで活動する
計画的に規則通り活動する
見通しをもって動ける
日記や文章化は得意
静かでおとなしい
反発や批判をしない
他者に指示命令をしない

苦手

人との関わりが苦手
親しい人以外と会話できない
見通しや計画を変更できない
相談等で本心を言えない
嫌、苦しいと言えない
命令指示されるのはストレス
リラックスの時間が必要
自分のリズムを崩せない

モデルSL(静かな退席者)

モデルSLの 良好ペース学習

- 一定のリズムで見通しがつく学校生活
- 自分のペースでできる活動
- 命令指示の少ない規則的な生活
- 学習の合間にリラックスできる時間

授業中心で学べる学校生活

授業で始まり授業で終わる無理のない学習の毎日

標準的な授業以外混在させない学校生活



します。

人との関わりが苦手で、親しくない人との会話が難しい。それを強制されるとストレスになります。見通しや予定を変更されるとストレスが増えます。相談などで本心を伝えられず、苦しくても嫌、NOと言えません。命令や指示を受けるのが苦手です。ストレスになります。リズム良い休憩時間が必要で、リラックスタイムが必須です。このリズムが崩れると心の不調をきたす。これが不登校傾向になりやすい仮想モデルSLです。

このSLが良好に学習を行える状況を想定します。一定のリズムで見通しがつく学校生活と、自分のペースでの学習活動ができることです。指示命令の少ない規則的な生活で学習の合間にリラックスできる休憩時間です。

これは授業中心で学べる学校生活そのものであると思われます。子どもが自分のペースで学習する。授業ではじまり授業で終わるという、当然守られるべき学習環境とペースです。

では反対にSLにストレスになるのはどんな状況でしょうか。

○学校に来れなくなる

人との関わりが過剰になる時です。変更が増え、自分の見通しが崩れることもストレスになる。リズムの良い休憩が取れなくなりリラックス時間を取れなくなる。先生や友達からの指示が増えてもストレスが強くなる。また提出物や活動が能力を超え飽和すると、深刻なストレスになる可能性が高いです。

これらは授業時間以外の活動が増加すると起こると思われます。

ストレスが断続的に増加するとセロトニンが減少する。この仕組みは別項目で説明します。

セロトニンが減少するとどうなるか。

恐怖感不安感が高くなる。そこに行く事に不安を感じる。

睡眠障害が起こる。夜寝られなくなり、朝に起きられなくなる。

摂食障がいも起こる。過食で大食いになったり、朝食を食べられなくなったりする。頭痛、腹痛、腰痛が起こり、朝に体調不良ということが起こる。そういうことが起こります。

医療的に医師の判断で、抗うつ剤を飲むこともあります。SSRIなどの抗うつ剤の成分はセロトニンが減らないようにする薬です。

しかし必要なのは、セロトニンが減少するストレスの原因に学校が対処することです。ストレスの原因の対処せずにセロトニン減少が続くと条件反射が起こります。

その条件はセロトニン減少が起こる場所や条件です。たとえば学校という場所が条件になると、学校に来るとセロトニンが減少し体調不調や不安恐怖感が起こる。また教室や学級集団いう条件ができれば、学級集団がいる所に行けなくなる。担任教師という条件ができれば、会えなくなる。意思や思考より根源的な行動調整機能です。

このモデルSLのストレスになる可能性がある事を考えてみませんか。

モデルSLの学校での**ストレス**

- 人との関わりが過剰になる
- 変更が増え、自分の見通しが崩れる
- 先生や生徒からの指示が増える
- リラックスのリズムが崩れる
- 提出物や活動が飽和状態になる

自分のペースで生活できない

行事が立て込むと断続的に起こる・・・



セロトニンが減少すると

- 恐怖感・不安感
- 睡眠障害 朝起きれない 夜寝られない
- 摂食障害 朝食が食べられない
- 頭痛・腹痛・腰痛 朝に腹痛 頭痛
- うつ症状 通院での投薬(抗うつ剤SNRI SSRI)

↓セロトニンを減少させない薬



END